

「恋愛迷子の私たち」

水瀬真理佳

○あらすじ

時は2030年。角田絃世（25）は、都内で看護師として働いている。周囲では結婚や出産をする人が増えていく中、絃世はしばらく恋愛ともご無沙汰状態。仕事やプライベートに大きな不満はないが、もちろん満足できていくわけでもなく。自分は一生おひとり様として生きていくのだと半ば諦めに入っていた。それを聞いた親友の松岡芽衣（25）は、絃世にAIのレンタル彼氏を勧める。それは外見や性格などを自分好みで選び、理想のAI彼氏をレンタルできるサービスだった。ほろ酔いのノリでなんとなくホームページを覗いた絃世は、深夜のテンションで注文をする。

そして遂に絃世の元に青木遼（29）と名乗るAIが現れる。しかし、遼は絃世の注文した理想の彼氏像とは異なっていた。会社了解約の連絡を入れるが、返金がないと知りひとまずレンタルを継続することに。こうして

AI彼氏・遼との同棲生活がスタートする。

空気を読むのが下手で、何かと理屈っぽい遼にはじめは呆れていた絃世だったが、一緒に生活をする中で、彼の真面目さや優しさに気づいていく。遼もまた、絃世との生活を通して、感情豊かになっていた。

ある日、同級生の結婚式で飲み過ぎた絃世は、そこで知り合った西宮翔平（26）に支えられて深夜に帰宅する。遼は絃世から連絡がないことを心配して待っていた。しかし絃世は酔っていたせいで「嫉妬しないのか」と遼に突っかかる。遼の機械的な返事に落ち込んだ絃世は、このままAIと疑似恋愛を続けたも仕方がないと思い、彼に別れを告げる。

ある日、ファミレスで仕事をしていた遼は、絃世が通勤で使っている電車が落雷の影響で止まっていると知り、彼女を迎えに行く。家までの帰り道、お互いの本音を伝え合った2人は、これからも一緒に過ごすことを決めたのだった。

○ 登場人物

角田 絃世 (25) 看護師

青木 遼 (29) AI

松岡 芽衣 (25) 絃世の親友

山本 胡桃 (23) 絃世の後輩

清水 日奈子 (25) 絃世の大学の友達

金子 美玖 (25) 絃世の大学の友達

島田 理央 (25) 絃世の大学の友達

早川 翼 (29) 合コン相手

南 大輝 (27) 合コン相手

大塚 健太 (27) 合コン相手

芝原 智哉 (30) 合コン相手

三井 麻里子 (25) 絃世の同級生

佐野慎太郎 (32) 医者

西宮翔平 (26) 結婚式の参加者

佐久間裕 (26) 結婚式の参加者

海斗 芽衣の推しのアイドル

安田 AIドリーム社員

絃世の母親

○オフィス街・歩道（夜）

仕事終わりのサラリーマンやOLが行
き交う。

○洋風バル・店内（夜）

ソファ席に男女8人が向かい合って座
っている。

早川「じゃあとりあえずカンパニー！」

早川翼（29）、乾杯の音頭をとる。

全員「カンパニー！」

角田紘世（25）、飲みながら男性4
人を順に見る。

早川「え、みんな本当に彼氏いないの？ 信
じらないんだけど！」

早川、オフィスカジュアルな格好にパ
ーマのかかった茶髪。

身に着けているピアス、指輪、スマホ
ケース、バッグが全て同じハイブラン
ドの柄物。

紘世M「（引きつった顔で）ああ……」

南「4人は何繋がりなんだっけ？ 職場？」

南、くちやくちやと咀嚼音をさせながら喋る。

紘世M「（顔を顰めて）んー！ー！ー！」

紘世、視線を逸らす。

理央「大学のサークルが一緒でした！」

大塚「日奈子ちゃんと美玖ちゃんが同じ経済
だったんだよね？」

日奈子と美玖「そうでーす！」

大塚「じゃあ石川廉って知ってる？」

日奈子「知ってますよ！」

美玖「私ゼミ一緒でした！」

大塚「アイツ、俺の高校の後輩なんだよ」

日奈子「えーうそお！ 世間狭すぎる！」

大塚「ちなみに、宮下加奈は分かる？ ミス
コンの」

美玖「もちろん！ 超有名人ですもん！」

日奈子「確かあの頃廉君と付き合ってたけど、
廉君フラれたって言ってた気がする」

大塚「そうそう、あれ俺が寝取ったから」

と、下品に笑う。

美玖「（ニヤニヤしながら）健太君後輩の彼女に手出したんですかあ？」

大塚「違う、向こうから来たんだって！」

日奈子「いやあ、でも正直加奈ちゃんは普通にそういうことしちゃいそうではある」

健太「だろ？ 加奈マジ緩いから！」

3人の笑い声が響く。

絃世M「はあ……」

芝原「なんか盛り上がってるね」

芝原智哉（30）が絃世に話しかける。

絃世「ですね」

と、愛想笑い。

絃世M「この人なら……！」

芝原「絃世ちゃん次何飲む？」

絃世「何にしようかなー？」

芝原「ワインとかいける？」

絃世「はい！ 結構好きです！」

芝原「じゃあ一緒にワインいこ！ 俺のオススメあるから」

と、手を挙げて店員を呼ぶ。

芝原「ここってアレある？ シャトーマルゴ
ー」

店員「申し訳ございません。当店では用意が
ございません」

芝原「（偉そうに）さすがにここにはないか。
じゃあいいや。これ2つ」

絃世、顔が引きつる。

店員「かしこまりました」

と、戻って行く。

芝原「ごめんね。ここにはなかった。ワイン
飲めるならいい店知ってるから今度一緒に
行こ。直近でいつ空いてる？」

絃世「……家帰って予定確認してみますね」

絃世M「もういやだああああ！」

○カフェ・店内

絃世「つてわけでね、いいなと思える人が1
人もいなかったの！ ちよつと嫌な部分
が見えただけで、もう無理ってなっちゃう。

恋愛ってこんなに難しかったっけ……？」

紘世、目の前に座る松岡芽衣（25）
に熱弁する。

芽衣「分かるよ！ 自分の中で人を好きになるハードルがどんどん上がってる感じしない？」

紘世「そうそう！ 芽衣もそういうことある？ 良かったあ、私だけじゃないんだ」

芽衣「私も海斗君に沼ってから、もう推し以外の人間を好きになれる気がしないもん」
テーブルの上にはアイドル・海斗のアクリルスタンドが置いてある。

紘世「さすがにアイドル様と比べちゃあ一般人は敵わないよ。こんなハイスペックな人は私たちの周りにはいないもん」

と、アクリルスタンドを撫でる。
芽衣「そ！ でも結婚はしたい！ 子供も欲しい！」

紘世「芽衣結婚願望あるの!!」

芽衣「あるよ！ なんか去年あたりから急に

みんな結婚とか出産ラッシュじゃん？ ああいうのを見るとねー。そうだ、覚えてる？
C組の木下さやかちゃん」

紘世「あーうつすらと！ 確か大学生の彼氏いた子だよね？」

芽衣「そうそう！ あの子もママになるらしいよ！ SNSにエコー写真載せてた」

紘世「そうなの!! 私結婚してたのも知らなかったよ」

芽衣「いや多分籍はこれから。デキ婚ぽいよ。あ、今は授かり婚か」

紘世「なんか晩婚晩産とか言われてるけど全然そんなことないよね。みんなすごいなあ」

芽衣「紘世は？ 結婚したいって言ってなかったっけ？ 子供も欲しいって」

紘世「結婚願望はあった！ 子供も欲しかった！」

芽衣「過去系？」

紘世「なんかさ、結婚したらしたで色々大変そうだし、不倫されたら悲しいなどか思う

となんかねえ。子供も、こんな私が自分以外の人生の責任を負うなんてムリムリって思っちゃって」

芽衣「あーね。冷静に考えちゃうよね。自分が親にしてもらったことを子供にできるかとか、自分より子供を優先できるかとか考えると、私も今すぐには無理かな」

紘世「親ってすごいよねえ……」

芽衣「でも恋愛は？ それも願望なし？」

紘世「それはある！ 恋愛は普通にしたい！ でもここでさっきの話に戻るわけよ！」

芽衣「ああ、好きになれる人がいないってや

つね」

紘世「そう！ だからね、私はもう一生おひとり様確定だよ」

芽衣「いつそのことAI活（アイカツ）してみたら？」

紘世「アイカツ？ 何それ？」

芽衣「え、知らない？ AI（エーアイ）活動、略してAI活。」

芽衣、「ほら」と、スマホの画面を見せる。

画面には【レンタルAIでAI活してみませんか？】、と。

家事代行やベビーシッター、家庭教師と書かれている。

その中に【レンタルAI彼氏】の文字。

絃世「レンタルAI彼氏……？」

芽衣「最近は恋愛目的のAIレンタル始めたらしい」

絃世「AIが彼氏になってくれるの？」

芽衣「そうそう。これ知り合いの先輩がやってるんだけど、見た目も中身も、自分の理想通りの人を選べるんだって！ しかもAIだからさ、一緒に過ごすうちにこっちの好みとか傾向を学習して、どんどん理想の恋人に成長していってくれるらしいよ」

絃世「なんかすごい時代になったねえ」

芽衣「ほら、結構良くない？」

と、ありふれたカップルのツーショット

トを見せる。

絃世「これA Iなの!! 普通に人じゃん!

私もっと硬い機械みたいなの想像してた!」

芽衣「(笑いながら)ちよつと! それ何年

前の話? 今どきそんなTHEロボットみ

たいなのいないよ!」

絃世「そっか。そうだよね」

と、頬を緩める。

○スーパー・店内(夜)

絃世、買い物かごを持って店内を歩く。

絃世M「角田絃世25歳看護師。独身彼氏ナ

シ。最後にちゃんと恋愛したのはいつだっ

たか…:ありがたいことに、都内で1人暮

らしができて、好きな物を食べて、欲しい

物も買って、旅行にも行ける。今日みたい

にホンネを話せる友達もいるし、これだけ

でも十分かなあとも思う。でもこのまま看

護師として働き続けるビジョンは全く見え

なくて、正直続けたいとも思っていない」

○住宅街・道（夜）

絃世、エコバッグを提げて緩やかな坂を上って行く。

絃世M「芽衣みたいに推しもないければ、養う家族もない。これといった趣味もなくて。やりたいこととか、大きな夢や希望もない。結婚願望もどこかに置いてきちやつて。私は、この先何をモチベーションに生きていくんだろう？」

絃世、夜空の月を見上げる。

○絃世のマンション・絃世の部屋・中（夜）

絃世、スリッパを履いて部屋の中へ。
広々とした1Kの部屋。
冷蔵庫から缶ビールを取り出しソファに座る。

絃世「はあ……」

スマホで【レンタルAI】と検索。

【月々10万↓今だけ特別価格！ 5万円 ※3か月以上】の文言。

スクロールして【診断スタート】を押す。

顔のタイプから始まり髪型、年齢、身長体重、職業、年収、性格など順番に選択していく方式。

絃世M「顔はパーツがはっきりしてる方が好きかな。塩より絶対醤油。ちよつと童顔で、色気もあるような…あ、こういうのマヨネーズ顔って言うんだ」

【ぱっちり二重 ホリ普通 肌トーン 明るめ】を選択。

髪型は【髪色暗め 長さ普通】、年齢は【25歳〜30歳】、体型は【身長175cm以上 ふつう体型】を選択。

絃世M「職業って…みんなこれが仕事じゃないんだ。副業でやってるのかな。別になんでもいいけど、年収は…それなりにあ

った方が嬉しい」

【職業指定なし 年収1000万円以上】を選択。

絃世M「あとは性格か。一緒にいて楽しい方がいいからノリが良くて明るくて清潔感ある人。でもチャラついてなくて誠実で、常識あつて、結局根は真面目な人が一番だね。あとは思いやりがあつて、頼りになつて、包み込んでくれるような…：たまに抜けてる可愛さがあるのもいいなあ。犬っぽい感じの」

絃世「ちよつと選び過ぎ？ ま、いっか！」
と、注文画面に進む。

【金額…15万円】

絃世、確定ボタンを押す。

絃世「これどうやって届くんだろう？」

○（想像）同・絃世の部屋・中

人の入る大きさの段ボール箱から半裸のイケメンが起き上がる。

イケメンAI「はじめまして！」

○同・絃世の部屋・中（夜）

絃世「さすがにそれはないか」

絃世、空いた缶を潰しながら立ち上がり、鼻歌を歌いながら歩いて行く。

テーブルの上のスマホ、「ご注文あり
がとうございました。到着までしばらく
くお待ちください」の文字。

○病院・ナースステーション

絃世、パソコンに向かって記録をする。

胡桃「そういえば先輩、例の合コンはどうだ
ったんですか？」

山本胡桃（23）が楽しそうに近づい
てくる。

絃世「どうも何も最悪だったよ。合コンは健
全に解散。その後連絡来たけどうまくかわ
してそれっきり。胡桃が期待してるような
ことは何もないよ」

胡桃「なーんだ。残念。先輩、彼氏つくらなくていいんですかー？」

と、口を尖らせる。

絃世が口を開きかけると、

佐野「ツノちゃん彼氏募集中なの？」

佐野慎太郎（32）が会話に入ってくる。

絃世「（面倒そうに）まあ、一応……？」

佐野「じゃあ飲も！俺セツティングするか

ら！」

胡桃「はいッ！ はいッ！ 先生！ 私も！」

佐野「オツケー任せで！」

佐野、書類にサインをして立ち去る。

胡桃「（小声で）佐野先生、オペ看に2股かけてたのがバレて今修羅場らしいですよ」

絃世「自業自得。ほんと、こんな狭いコミュニケーションテイでよくやるよね」

胡桃「しかも先生って普通に既婚ですよね？」

絃世「うん。子供もいるよ」

胡桃「うっわ……本物のクズだった」

と、口元を押さえる。

絃世「でもあの人がやることはやってくれるからね。追加指示出す時は看護師にひと声かけて、ちゃんとピッチに出てくれれば、それだけでいいよお医者様は」

胡桃「（笑いながら）確かに、やることはやってますよねえ。仕事でも、プライベートでも」

○電車・車内（夜）

絃世、ドア付近に立って窓に映る自分を見つめる。

優先席に座ってイチャつく若いカップル。

絃世、カップルをチラッと見て微笑む。

絃世M「いいねえ、ラブラブカップル」

絃世、彼女の左手の薬指に指輪が見える。

気まずそうに窓の外に視線を戻す。

絃世M「友達とかよりも、街で見かけた全然

知らない女性が結婚してるって分かった時の方が心がザワつくのって私だけだろうか……？」

○ 絃世のマンション・絃世の部屋の前（夜）

ドアの前に青木遼（29）が立っている。

絃世、おそろおそろ近づいて、

絃世「あの……うちに何か用でしょうか？」

青木「はじめまして。青木遼です」

青木、名刺と紙を取り出す。

絃世「株式会社A I ドリーム、レンタルA I

青木遼……さん……」

と、読み上げる。

紙には【履歴書】と書かれている。

絃世「レンタルA I……あぁっ！」

○（回想）同・絃世の部屋の中（夜）

絃世、ソファに座ってビールを飲みながらレンタルA I を注文。

○同・絃世の部屋の前（夜）

絃世M「そういえば酔った勢いで何か注文したような……」

と、額を押さえる。

青木「ご注文ありがとうございます。今日からあなたのレンタル彼氏を務めます青木遼です」

と、丁寧にお辞儀。

絃世「ちよつと待ってください！」

絃世、青木を頭から足先まで見ていく。

絃世M「切れ長で奥二重の目、ハイトーンの髪の毛。身長はまあいいとして。鍛えてるのか、服の上からでも分かる筋肉質な体。ちよつと怖いし。これは犬というより狼に近い……注文したのと全然違うくない？」

絃世「あなたに言うのは申し訳ないんですけど、注文と違う気がして……待ってください、今確認するので」

と、スマホを確認。

【注文に関するお問い合わせは以下で

受け付けます。受付時間…9時～18

時】

絃世M「時間外か…でもこのまま追い返すのも可哀想だよね」

絃世「（渋々）とりあえず中にどうぞ」

青木「お邪魔します」

○同・絃世の部屋の中（夜）

絃世「荷物はその辺にどうぞ」

青木、床にリュックサックを置く。

絃世「あの、素朴な疑問なんですけど、AIの方ってごはんとかお風呂とかそういうのってどうしてるんですか？」

青木「食事もするし、もちろん食べたなら排泄も。水に濡れて壊れたりしないので風呂も入れます。俺は温泉とか好きです。脳を休めるために睡眠もとります。ロボットというより、クローン人間を想像してもらえれば分かりやすいかと」

絃世「なるほど。夜ごはんはもう食べたんで

すか？」

青木「はい」

絃世「じゃあお風呂沸いてるので先にどうぞ。タオルとかは向こうに置いてあるので自由に使ってください」

青木「一緒に入らないんですか？」

絃世「はいっ?! 何で私が!!」

青木「恋人同士なので一応聞いてみました。

なるほど、入浴は別々がいいんですね。記憶しておきます。じゃあお先に」

と、浴室へ向かう。

絃世、啞然とする。

絃世M「なんか想像以上にヤバイやつかも……」

× × ×

絃世、ソファに毛布を置く。

絃世「(淡々と)申し訳ないですが、今日はソファにお願いします」

青木、絃世をじっと見つめて、

青木「あの……」

絃世「……はい？」

青木「もし何か不満があるなら遠慮せず言ってください。あなたの理想の彼氏になるよう毎日データを更新します」

絃世、ため息をつく。

絃世「えっと……せっかく来てもらったところ申し訳ないんですけど、あなたは私の注文とちよつと違って。別にあなたのことを否定するつもりはないんですけどね。とにかく、すぐ解約するのでデータの更新とかはいらないです！」

青木「なるほど、分かりました。以後気をつけます」

絃世「いや、だから以後とかじゃなくて！」

青木「不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした」

と、頭を下げてソファに横になる。

青木「おやすみなさい」

絃世「……お、やすみなさい……」

絃世、電気を消してベッドに入る。

絃世M「とにかく明日早急に解約手続きし
う！」

○同（朝）

カーテンの隙間から光が差し込む。

スマホのアラームが鳴る。

絃世、ゴソゴソしながら音を止める。

絃世「ん……？」

絃世の腰には青木の手。

絃世、ゆっくりと寝返りを打つ。

目の前に青木の寝顔。

絃世、固まる。

青木「んっ……おはよ、絃世」

と、目を開けて絃世を抱き寄せる。

絃世「ちよっ！ ストップ！ 何であなたが

私のベッドで寝てるんですか!!」

と、押し返すがびくともしない。

青木「絃世の注文内容を確認したら、包み込
んでくれる人がいって書いてあったから」

絃世、勢いよく起き上がる。

絃世「それは性格のこと！ 誰が出会って数時間の得体の知れないAIに抱きしめて寝て欲しいなんてお願いするんですか!!」

青木、体を起こして、

青木「すいません…：またダメでしたか。やっぱり難しいな、人の気持ちって…：」

と、しゅんとする。

絃世「あの、こんなこと言うのもあれなんですけど…：AIなら脳の設定変えたりとかして、もう少し上手くやれたりしないんですか…：？」

青木「AIと言っても、人と同じように個性があるし、俺はそんなに器用ではないので…：」

絃世M「つまり、私はハズレってこと!!」

青木「絃世さん…：？」

と、絃世の顔を覗き込む。

絃世「もう決めました！ 今日電話して解約手続きしてもらいます！」

と、布団を抜けて歩いて行く。

青木、不思議そうな顔で絃世の背中を見つめる。

○病院・非常階段

絃世、青木の履歴書を見ながら電話をかける。

絃世M「あの人29歳なんだ。仕事はシステムエンジニア。しかもこれ超大手の会社だ」

安田の声「お待たせしました角田様。担当の安田と申します。本日は解約の件でよろしかったでしょうか？」

絃世「はい、お願いします」

安田の声「はじめに、解約の理由だけ伺ってもよろしいでしょうか？」

絃世「私が注文したタイプと全然違ったんです。彼は色々合わせてくれようとしたんですけど、ちよつともういいかなと思って」

安田の声「なるほどそうでしたか。その時のレンタル状況によつてご希望に100%沿ったAIをご用意できないこともあり……

大変申し訳ございませんでした。それでは解約手続きを進めさせていただきます。今回ですが、契約書にもありました通り、特別価格でのご提供でしたので返金はいません」

絃世「ええっ!!」

絃世、スピーカーにして契約書を確認。

【※ご希望に沿えない場合もごさいます。 ※解約の場合も返金は致しかねます】

絃世M「文字ちつつさ！　こんなの読めないし！」

絃世「クリーニングオフとかできないんですか？」

安田の声「あいにく、インターネットなどでお申し込みいただく物は各事業者の判断になりますので……」

絃世M「（青ざめる）一晩勝手に添い寝されただけで15万払うことになるの!!」

絃世「……あの、やっぱりもう少し考えます」

安田の声「（明るく）かしこまりました！また何かございましたらいつでもお電話ください」

絃世、耳からスマホを離し、大きく深呼吸。

絃世M「こうなったら3か月、久しぶりの恋愛を存分に満喫してやるんだから！」

○絃世のマンション・絃世の部屋の中（夜）
床に正座で向かい合う絃世と青木。

絃世「ということで、3か月はこのままレンタルを継続することにしました」

青木「良かったです。ありがとうございます」

絃世「そこで私からお願いがあります」

青木「はい」

絃世「まず、『記憶しておきます』とかそういうAIっぽい発言はやめてほしいです」

青木「なるほど、分かりました」

絃世「あと、ちょっと堅苦しい感じがあるので、とりあえず敬語はやめてください。私

の方が年下ですし」

青木「分かった」

絃世「じゃあとりあえず、よろしくお願いします」

青木「こちらこそ」

絃世と青木、控えめに握手。

青木「そういえば安田さんからお詫びを預かってる」

青木、絃世にチケットを渡す。

絃世「スカイツリー無料チケット？」

青木「しかも建物内で使える1万円分の商品券付き」

絃世「へえすごい……」

青木「何か安田さんの弱みでも握ってるのか？」

絃世「私がそんな人間に見えますか!!」

青木「……いや」

絃世「ちよつと、なんなんですか今の間は！」
青木、逃げるように立ち上がる。

絃世「……あ、あの！ 良かったらこれ一緒

に行きませんか？」

と、チケットを見せる。

青木、固まる。

青木「……俺でいいのか？」

絃世「だって、一応私の彼氏……なんですよね？」

青木「……そうだな。じゃあ次の休みに」

絃世「はい、分かりました」

絃世M「こうして私とAI彼氏（仮）との奇

妙な同棲生活が始まった」

○スカイツリー・外観（朝）

○同・入場フロア（朝）

チケットカウンターに並ぶ人々。

○同・展望デッキ（朝）

絃世と青木、エレベーターから降りる。

絃世が周りを見ると、腕を組んだり手を繋いでいるカップルが目立つ。

青木、絃世を見て手を差し出す。

絃世「？」

青木「手、繋ぎたいのか？」

絃世「いや、別にそういうんじゃない！」

青木「そうか」

と、手を戻す。

絃世M「何今の質問！ 私そんな羨ましそうに見てた？ しかも超上から視線だった！」

と、不機嫌そうに青木の背中を睨む。

青木「あそこから見て行こう！」

と、人が少ない窓を指差す。

絃世「は、はい！」

と、ついて行く。

青木「あっちが新宿方面で、向こうが渋谷で、

あれは……」

と、景色を指差す。

絃世、青木を見ながら、

絃世M「ああいう時は『うん、繋ぎたかつ

た！ よく分かったね！』なんて可愛く素

直に言うのが正解なんだよね、分かってる。

分かってるけど……！

青木「何か考えごとか？」

と、絃世を覗き込む。

絃世「ごめんなさい！　ボーっとしてて」

青木「絃世は何か考えてる時、ちよつと唇が

ぎゅつとなるから分かりやすい」

絃世「そうなんですか!!」

青木「うんそうだよ」

絃世、恥ずかしそうに俯く。

青木「あと、お腹が空いてると機嫌が悪くなる」

絃世「そんなことっ……ある、かも……」

青木、クスッと笑う。

絃世M「あ、今笑った」

青木「ちよつと早いけど昼にしよう」

絃世「いいですけど、別に私お腹空いてたわけじゃないですからね!!」

青木「そういうことにしておく」

と、エレベーターに向かう。

絃世、「もう！」と追いかける。

○もんじゃ屋・店内

絃世と青木、もんじゃを焼きながら談笑。

絃世「青木さんっていつからこのレンタルの仕事してるんですか？」

青木「つい最近。今回が初めての仕事なんだ」

絃世「（意地悪く）あー！ だからぎこちないんですね！」

青木「それは否定できないけど、聞き捨てならないな」

絃世、フフツと笑う。

○商業施設・中

絃世と青木、並んで歩きながら店を見て回る。

絃世「今日のお出かけ誘った時も『俺でいいのか？』なんて聞いてくるし。全然彼氏感が足りないです！」

青木「だからさつき手を繋ごうって言ったのに、絃世が断るから」

絃世「そんなこと言われてないです！

『（遼の真似）手、繋いでやろうか？』で
したから！」

青木「その言い方は悪意がある。それに正確
には『手、繋ぎたいのか？』だった」

絃世「うっわぁ！ ちゃんと覚えてるのなん
か嫌な感じ！」

青木「なるほど。さっきボーっとしてたのは
このことを考えてたからか」

絃世「違いますからっ！」

青木「今からでも手繋ぐか？」

絃世「繋ぎません！」

青木、また口角を上げる。

○住宅街・道（夜）

絃世と青木、並んで坂道を歩く。

青木「そうだ、俺からもお願いしていいか？」

絃世「なんですか？」

青木「絃世も敬語はなしにしよう。その方が
距離が縮まると本に書いてあった。あと、

俺のことも呼び捨てでいい」

絃世「じゃあ……遼」

青木「うん、これで少しは恋人らしいかな」

絃世「ただ名前呼んだだけだけどね」

青木「まあそうだけど。でも俺は今日1日で

絃世のことを色々知れたから良かった」

絃世「私は、正直まだ遼のことはよく分から

ないけど……でも今日は楽しかった」

並んで歩く2人、手は繋いでいない。

○病院・休憩室（夜）

胡桃、ソファに座って休憩中。

絃世、部屋に入って来る。

胡桃「先輩お疲れ様です！ 夜勤お願いしま

ーす」

絃世「よろしく！ 落ち着いてるといいねー」

と、ロッカーに荷物を入れる。

胡桃、絃世をじっと見て、

胡桃「先輩、最近なんかいいことありまし

た？」

絃世「別に何もー？ いつも通りだよ」

胡桃「絶対嘘！ 私の目は誤魔化せませんよ。
もしや男だな……？」

絃世、ロッカーの扉を閉めて振り返る。

絃世「（頬が緩む）……」

胡桃「ほらやっぱり！ 話してください！」

絃世「ほら、早く行かないと時間なくなるよ
」

と、足取り軽く部屋を出て行く。

○同・病棟廊下（深夜）

絃世、懐中電灯を持って巡視する。

絃世M「遼が家に来て1か月が過ぎた。相変
わらずKYなことを言う時もあるけど、少
しずつ遼の感情が豊かになってきている気
がして、それがちよつと嬉しかったり。家
に自分以外の人がいるのも慣れて、それな
りに恋人同士らしくもなってきたと思う」

○絃世のマンション・絃世の部屋の中（夜）

青木、料理をしている。

玄関でドアが閉まる音。

絃世が帰って来る。

絃世「ん〜いい匂い！」

青木「おかえり。もうできるよ」

絃世「ただいま。ありがと！ 手洗ってくる

ね」

× × ×

テーブルに料理が並ぶ。

絃世と青木、席に着く。

絃世「美味しそう！ いただきます！」

と、手を合わせて食べ始める。

青木「絃世は本当に幸せそうに食べるな」

絃世「遼が作ってくれるごはんが美味しいか

らね」

青木、目を丸くして絃世を見つめる。

青木「……」

絃世「どうかした？」

青木「……いや。今まで絃世がどんな食生活を送ってきたか考えるだけで恐ろしいと思

って。絃世が20代女性の1日必要摂取カロリーをとれていたとは到底思えない」

絃世「……だって、自分1人のためにごはん作るの面倒くさいんだもん」

と、口を尖らせる。

青木「(ボソツと)……今は」

絃世「え？」

青木「今は俺がいるから、俺のために作るっていうのは理由にならないか……？」

絃世、手を止めて青木を見つめる。

絃世M「いつの間にそんなこと言えるようになったの!!」

絃世「……そうだね。じゃあ明日は私が作る！」

青木「(嬉しそうに)絃世の初手料理だな」

絃世「あんまり期待はしないでね？」

× × ×

絃世と青木、ソファに座ってテレビドラマを見る。

画面には男女が自転車を2人乗りして

いるシーン。

絃世「良かったあ。この2人ヨリ戻って！」

と、拍手。

青木「自転車の2人乗りは東京の道路交通規則で禁止だけだな」

絃世「もう！　すぐそういうこと言う！　これはドラマだからいいの！」

と、青木を睨んで叩こうとする。

青木、あっさり絃世の手を掴んで阻止。

青木「ごめん。悪気はないんだけどつい」

絃世「もお！」

と、視線を画面に戻す。

絃世「特別なデートとかじゃなくていいんだ

よね。ありふれた日常と一緒に過ごす人が

いるっていうのが結局一番幸せな気がする。

いいな」

青木「絃世はこういうのが好きなんだな」

絃世「そうだよ！　覚えといてね！」

と、冗談ぽく笑う。

青木「分かった」

× × ×

絃世、ベッドの布団に入る。

青木「じゃあ消すよ」

絃世「うん」

青木、絃世の隣に寝る。

絃世「おやすみ」

青木「おやすみ」

仰向けに並んで眠る2人。

○絃世のマンション・絃世の部屋の中（朝）

絃世、玄関で靴を履く。

パーティードレスで着飾っている。

青木「じゃあ帰る時に連絡して」

絃世「うん！ 行ってきます！」

と、ドアを開ける。

○結婚式会場・入口

ウェルカムボードが飾ってある。

○同・式場内

参列者、着席して新郎新婦たちを見つめる。

新郎新婦、指輪の交換をする。

絃世、前を見ながら、

絃世M「例えばこのまま遼と順調にいったとして、私たちにもこういう未来ってあるのかな……？　そもそもAIと結婚なんてできるの？　お母さんたちに遼を紹介したら、一体どんな反応されるんだろう」

○レストラン・店内（夜）

絃世と芽衣のテーブルに三井麻里子

（25）がやって来る。

麻里子「今日は来てくれてありがとう！」

絃世「こちらこそ！　すっごく素敵だったよ」

芽衣「準備大変だったでしょ？」

麻里子「もう結婚するのやめようかなって思ってたくらい喧嘩したけど、でも彼もそれなりに楽しんでくれてたみたいだし、良かった」

紘世と芽衣、微笑む。

麻里子「2人は？ 最近どう？」

芽衣「相変わらずオタクやってるよ。今は推しのことしか考えらんないかな」

麻里子「さすが芽衣。変わんないね！ 紘世は？」

紘世「私は……なんかフラフラしちゃってるかな」

と、誤魔化する。

麻里子「そっか！ でも20代は落ち着かずに遊びつくした方がいいよね〜！」

紘世、「あはは」と愛想笑い。

× × ×

芽衣「ちよっと紘世大丈夫？ 飲みすぎだよ」

紘世、顔を赤くしてグラスを持っていく。

紘世「いいのお！ 今日は飲むって決めたの

お！ 芽衣も飲む！」

と、乾杯する。

西宮「僕らも一緒にいいですか？」

西宮翔平（26）と佐久間裕（26）

がやってくる。

絃世「どうぞおろ！　たくさん飲みましょ」

佐久間「飲みっぷり良さそうですね。もうかなり仕上がってるけど」

芽衣「（苦笑）なんか今日この子飲みベーション

ションすごくて」

西宮「いいですね！　付き合いますよ！」

芽衣、心配そうに絃世を見る。

絃世、ご機嫌な顔。

○同・店の外（夜）

芽衣、フラフラしている絃世を支える。

芽衣「飲み過ぎだよ！　タクシーもう来るか

ら頑張って！」

絃世「うん大丈夫帰れるからあ」

西宮「家どっちの方ですか？」

芽衣「この子は目黒の方で、私は台東区です」

西宮「そしたら俺通り道なので角田さん送り

ますよ」

芽衣「……すいません、お願いしてもいいですか？」

西宮「任せてください」

道路脇に止まったタクシーに絃世と西宮が乗り込む。

西宮「じゃあおやすみなさい」

芽衣「おやすみなさい。絃世をお願いします」
タクシーのドアが閉まり発進する。

○絃世のマンション・絃世の部屋の中（夜）

青木、ソファに座って時計を見る。

23..50の表示。

玄関で鍵を開ける音がする。

青木「やっと帰って来た」

と、立ち上がり玄関の方へ行く。

青木「帰る時連絡してって言ったじゃ……」

青木と西宮、お互いの顔を見て固まる。

絃世、西宮に支えられて立っている。

西宮「えーつと……こちらの方は？」

絃世「んー。ああ、遼はね、私のお」

青木「（西宮に言葉を被せて）彼氏です」

西宮「あぁー！ 彼氏さんか。彼氏さんね：

…」

と、テンションが下がる。

青木「絃世がご迷惑をおかけしました」

と、絃世を支える。

西宮「いえ…：おやすみなさい」

と、気まずそうに出て行く。

青木「（不機嫌そうに）とりあえずソファ行

こ」

青木、絃世を支えながらソファまで連れて行く。

青木「（不機嫌そうに）今水持ってくるから」

絃世、青木の服の裾を掴んで止める。

絃世「ねえ、なんか怒ってる？」

青木「別に怒ってない」

絃世「嘘。怒ってるよ。いつもと違うもん」

青木、ため息をついて、

青木「こんな時間まで連絡がなかったんだから、普通心配するだろ」

絃世「……ああ、そっちなか」

青木「？」

絃世「遼ってさ、嫉妬とかしないの？ 私が

どこで誰と何してても平気？」

青木「何で今そんな話になるのか分からない

けど、答えは『しない』。でも絃世がして

ほしいならする」

青木が答えるとクッションが飛んでくる。

絃世「そういうことじゃないじゃん！」

青木、クッションを拾って、

青木「絃世の方がよっぽど怒ってるね。俺ち

よつとコンビニ行ってくる」

と、部屋を出る。

絃世、ソファに寝転んでジタバタする。

絃世M「あー何言ってるんだ私！ 酔っ払い

のダル絡みなんて最悪！ 超面倒くさいこ

じらせ女じゃん」

と、泣きそうな顔をする。

○同・絃世の部屋の前（夜）

青木、ドアに寄りかかる。

青木「なんだこれ……」

と、額に手を当てる。

○絃世のマンション・絃世の部屋の中（朝）

絃世「んっ……」

と、目を覚ます。

窓の外は曇っている。

ベッドの隣は誰もいない。

絃世、部屋を見回して眠そうにソファ

を移動する。

テーブルのスマホから着信音。

絃世「もしもし？」

母の声「ごめん寝てた？ 今大丈夫？」

絃世「うん」

母の声「昨日荷物送ったの。色々入れたから

楽しみにしててね」

絃世「おー！ ありがとう！」

母の声「今日は仕事休み？」

絃世「うん休み」

母の声「ちゃんと食べてるのー？」

絃世「うん。最近は結構ちゃんとしてるかな」

母の声「もしかして彼氏できた？」

絃世M「（苦笑）なに、エスパーなの？」

絃世「お母さんが思ってるような感じの彼氏

はいないかな」

絃世、玄関を見ると青木が立っている。

青木、「電話？」とジェスチャー。

絃世、頷く。

母の声「何よそれー！もしかして、マッチ

アプリとかいうやつやってるの？流行っ

てるみたいだけど気をつけなさいよ？」

絃世「……ああ、マッチングアプリね。うん

大丈夫、やってないから」

絃世M「お母さんごめん。あなたの娘は15

万払ってAIと同棲してます……」

母の声「仕事忙しいと思うけど、無理しない

でね。たまには帰ってきてね」

絃世「はい！ありがとうございます。バイバイ」

と、電話を切る。

青木「電話、お母さん？」

絃世「……うん。遼はランニング行ってたの？」

青木「うん。明日から雨続くらいから」

と、冷蔵庫からお茶を出す。

絃世M「さっきの会話、聞こえてたよね？」

と、気まずい顔で遼を見る。

しかし青木はいつも通り。

絃世「あのさ、この間のことなんだけど……」

青木「この間……？ 何かあったっけ？」

絃世「私が結婚式行った日」

青木「あー！ 結婚式楽しかった？」

絃世「うん楽しかったんだけど、そうじゃないよ……あの日連絡しなくてごめんね。しかも起きて待っていてくれたのに、私遼に突っかかっちゃった。ごめん」

青木「もしかしてずっと気にしてたの？ 何も思っていないから大丈夫だよ」

と、けろっとしている。

絃世M 「私に気を遣ってるとかじゃない。本当に何も思っていないんだ……そうだよね、AIだもんね」

絃世、表情が曇る。

○病院・休憩室

絃世、ソファに座ってスマホを見る。

画面、芽衣からのメッセージ。

〈芽衣…この間絃世のこと送ってくれた翔平さんがまた絃世と飲みたいって！ 連絡先教えていい？〉

絃世M 「翔平さん……普通にいい人だったよね……？ あんまり記憶ないけど」

絃世、スマホを仕舞って部屋を出る。

○住宅街・道（夜）

絃世、俯きながら歩く。

絃世M 「『いい人いないの？』 『結婚は？』
そんな質問に、毎回同じようなテンプレの
答えを返すのもいい加減疲れてきた。ちゃ

んと普通の恋愛、しないとだよね……」

絃世の頬に雨粒が落ちてくる。

濡れないように小走りする。

○絃世のマンション・入口（夜）

絃世、入口に駆け込んでスマホを出す。

芽衣に「教えていいよ！」と返信。

○同・絃世の部屋の中（夜）

絃世、玄関に入って来る。

青木「おかえり」

と、玄関に来る。

青木「雨降ってきた？ タオル持ってくるよ」

絃世、青木の手を掴んで止める。

青木「（不思議そうに）どうかした？」

絃世「……私、レンタル解約しようと思う」

青木、動揺した顔。

青木「俺、またなんかやっちゃった……？」

絃世、首を横に振る。

絃世「遼は何も悪くないよ。これは私の問題。」

レンタル彼氏に頼らないで、ちゃんとした恋愛を頑張ろうと思って。時間無駄にできないし」

青木「……そっか。絃世が決めたことなら俺は何も言わない」

絃世「……」

青木「なるべく早く荷物まとめて出て行くから」

絃世「……そんなに急がなくても大丈夫だよ」

青木「ありがと。でも荷物少ないし大丈夫」

青木、絃世の手を解いて部屋の中に戻って行く。

絃世M「そんなあっさり納得しないでよ。こう思ってしまった私は、本当にわがままだ。ちゃんとした恋愛って、何言ってるんだろう私……」

絃世、手を握りしめる。

× × ×

電気を消してベッドに寝ている2人。お互い少し離れて背中を向けている。

○同・入口（朝）

入口で向き合う2人。

青木「……今日までありがとう。元気でね」

紘世「うん……遼もね」

青木、背を向けて歩いて行く。

紘世、手を伸ばしかけて戻し、反対方向に歩いて行く。

○道端

生えてる草花に雨が降り始める。

○病院・ナースステーション

窓の外は雨が降っている。

紘世、薬袋の仕分け作業をしている。

○ファミレス・店内

青木、パソコンを広げて作業。

雷がゴロゴロ鳴る。窓の外は大雨。

青木、ネットニュースを見る。【落雷の影響で運転見合わせ】の見出し。

青木「絃世の乗ってる路線だ……」

青木、絃世とのメッセージ画面を開いて文字を打とうとする。

○ 駅・改札・外（夜）

雨が止んで澄んだ夜空。

駅前には人で溢れ、バス停やタクシー乗り場は長蛇の列。

絃世「嘘でしょ……」

絃世、マップで自宅までの経路を調べる。

女性の声「まーくん来てくれてありがとう！」

道路脇に止まった車の助手席に女性が乗り込む。

ドアが閉まって車が発進する。

絃世、ため息をつく。

スマホのマップには徒歩50分の表示。

絃世M「50分なんて全然許容範囲だし！」

絃世、歩き出す。

青木の声「絃世！」

絃世が振り返ると自転車に乗った青木。

絃世「遼？ 何でここに!!」

青木「良かったまだいて。メッセージ見てなかっただろ？」

絃世、メッセージを確認。

〈遼…駅まで迎えに行く〉、と。

絃世「ごめん、見てなかった。まさか電車止まってるから来てくれたの？」

青木「うん。さ、乗って！ 乗り心地はイマイチかもしれないけど」

と、自転車のキャリアを触る。

絃世、青木を見てクスッと笑う。

青木「今の何か面白かった……？」

絃世「（ニヤニヤしながら）あのね、せっかく来てくれたのに言いにくいんだけど……」

青木「？」

絃世「自転車の2人乗りは、東京の道路交通規則で禁止なんでしょ？」

青木「あ……」

と、固まる。

○住宅街・道（夜）

絃世と青木、自転車を押しながら並んで歩く。

青木「不覚だった……」

絃世「珍しいね。遼もこんなことあるんだ」

青木「ドラマのこと思い出して、気付いたら

飛び出してたから……」

絃世、青木の横顔を見て、

絃世「ねえ。私酷いこと言ったのに何で来てくれたの？」

青木「酷いこと……この間の『ちゃんとした恋愛を頑張る』ってやつか？」

絃世「うん……あと時間が無駄とか……」

青木「酷いかどうかはよく分からない」

絃世M「まあ、そうだよね……」

青木「俺はただ、ニュースを見て、絃世を迎えに行かなきゃと思った。それだけだよ」

絃世「そっか……ありがとね！」

青木は立ち止まり、絃世は歩き続ける。

青木「絃世！」

絃世、立ち止まって振り返る。

絃世「ん？」

青木「俺、思ったんだ。もっと絃世と同じものを見て、同じ所に行って、同じものを食べて。これからもありふれた日常を絃世と一緒に過ごしたいって。これはきっと絃世を困らせるわがままなんだろうけど……」

絃世、青木の方へ戻る。

絃世「わがままは私だよ。自分から終わらせようって言ったくせに。気持ちがブレブレなんかもん」

青木「ブレブレ？」

絃世「私も、本当は遠と一緒にいたいのに、あんなこと言っちゃったってこと」

青木、頬を緩めて絃世に手を差し出す。

青木「手、繋ぎたい」

絃世「（嬉しそうに）今日は疑問形じゃないの？」

青木「うん違う。俺が繋ぎたいから、繋いでほしい」

絃世「（笑顔で）うん、私も」

青木、絃世の手を握る。

青木「帰ろうか」

絃世「うん！」

手を繋いで歩く2人。

絃世N「彼は私の好きなタイプとは真逆の、
どちらかというと物静かで、KYで、派手
な髪色の筋肉質。だけど実は思いやりに溢
れた真面目なしっかり者で、たまに抜けて
る可愛い一面もある。そんなAIに、私は
久しぶりの恋をした」

（了）